

散文長詩

器械屋の憂鬱

ボードレール風に習作

井本元義

私は祖父の代から続く医療器械販売の会社を経営していた。私が死んだ父の跡を継いで社長になったのはまだバブルが始まる前であつたから、私の若さを誰も問題にはしなかつた。プライドの高い医者を相手に商売するのは楽だつたし、お互いに少々お金にずぼらでも結構お互いが儲かる時代であつた。日々は単調に流れて行つたし暇を潰すというよりぼんやりしてふと気がつくといふ長い時間がいつの間にか流れ、一日が終わつていふというふと何年も過ぎたことだつた。医者も医療よりも金儲けを重視した部類の人たちはまず土地から株から女と投資していた。しかしバブルがはじけ威勢のよかつた医院も片つ端から潰れる時代がいきなり訪れてきた。当然に私の会社も不良債権を抱え経営は一瞬にして苦しくなつた。またなんの新しい施策も打たず最新式の医療器械の勉強もしていない私の会社は新興の会社に瞬く間に市場を取られてしまふことになつた。冷たい銀行の貸し剥がしにも対応することもできず、社員も一人減り二人減り、社屋も取られとうとう残つたのは郊外にある大きな倉庫と長い間私に番犬のように仕えてくれた忠実な一人の社員だけになつた。忘れてしまいかつたがその数年のドタバタの日々に私は2才の子供を亡くし、

いつのまにかいなくなつた妻のこともほとんど記憶に残らないほどに変わつてしまつた人生を送るようになっていた。

一人残つたKという社員は私に影のようにつもつてきてくれたし結構頭もいい人間だつた。彼は方々の潰れた病院医院から使い古しの医療器械を集めてくるようになった。倉庫は広がつたのでタダ同然で引き取つてきた器械を保管するには充分だつた。廃棄する器械を洗淨するものは誰もいない。血液や肉片や体毛のついたままの組織がごびりついていてるものも多かつた。私たちの仕事はそれをきれいに洗淨して油を差し使えるようにして販売することであつた。経営の楽でない医院相手に器械はよく売れた。私とKは別に食つに困らないほどの仕事しかする気はなかつたが忙しくなるばかりだつた。そして意に反して小金も溜まるようになっていった。倉庫の中は異様な匂いで充満していた。私とKの風貌も異常なばかりに変わつていたに違いない。しかし気に留める必要はなにもなかつた。ただ私の人生はなぜこうも二転三転するのだらうか。ある朝、倉庫へ行くと高い天井から奇妙なものがぶらさがっているのに気がついた。それは首を吊つたKだつた。理由はわからない。人間の肉体に差し込まれたり切つたり引きちぎつたりする金属の器械に毒されたのか、洗い流された様々な人間の肉の組織の呪いなのか。彼は気が狂つたに違いない。

それで私はこの仕事も止めることにした。さりとてする事も無い。生活に困ることも無い。憂鬱な日々が始まつた。これがふた昔前のことだつたら早速私は阿片窟に出かけ至福の悠久の時間に浸り悔いのない死を迎える事ができるはずであつた。本でも読むことにするか。それである時私はこの詩句に出会うことになつた。「今いる場所でないとこへ行けば、いつも幸福になれるような気

がする、どこでもかまわぬ、どこでもかまわぬ、この世の外でありさえすれば」私の人生は四転することとなった。ある年の晩春私はついに異国の地に立つた。そこは東洋と西洋の混じった小さな島で、宝石の売買で栄え賭博場と娼窟と阿片窟が公認されているという所であった。その頃私は小金どころかまああの金を持っていた。沢山の社員を抱えて会社を経営してネクタイを絞めていた数年前となんという変わりようだろうかと考えるとおかしいというより実に爽快な気持だった。その高揚した気持ちのためだったか私が酒や女よりもまず最初に足を踏み入れたのは賭博場だった。いつか小説で読んだ男の話を思い出したためだった。すべてを投げ打って勝負する賭博の魅力とは。今の私には関係のない話ではあるがふとその気になっただけである。

確かにスリルはあったし楽しい事ではあった。大金を一発で賭けて勝負をするということは勿体ないことであった。少しずつ私は心安らかな時間を楽しんだ。ふと明日の朝目覚めた時に今日も何か楽しいことがありそうだと思つ自分をなぜか想像したりした。何年ぶりの酒も手にした。香水と他人の煙草の匂いが快い。いよいよ安住の阿片の世界へ降りていくが。その時だった。ふと正面の席を見るとKがいたのだ。なぜか私は驚きよりも自然に彼を見た。彼も特別に変わった表情は見せずにしきりに視線をある数字に向けて私に合図するのだった。思わず私はその数字に手持ちのチップを全て賭けてしまった。私の誕生日の14、彼が首を括つたのも14日だった。チップから手を放し目を向けると彼は昔景気がよかった頃に大きな商談を纏めたときによく私に見せた事のあるウイנקをしたのだった。ルーレットが回り始めた。そして出た数字は14であった。

わつと歓声があがる。しかしそこに彼の姿はなかった。私はまわりに祝儀を払い換金して外に出た。たかが36倍であるから大した金額ではない。しかし気分は悪くない。Kはどこへ行ったのか。あの大きなガランドウにぶら下がっていたのは本当にKだったのか。幽霊か。しかし私には恐怖はなかったし久々に幸福な気持だった。少し大袈裟ではあるがこれで安心して心おきなく死んでいくこともできるとさえ感じられた。

海岸通りは美しい夜であった。この島から大陸へかかっている一本の長い橋には無彩色の無数のライトが連なりまたそれが海面に映えていた。対岸は色とりどりのネオンがきらめき怪しげな歓楽の夜を想像させた。海からのそよ風がこの上なく快い。それが一瞬首筋をさつと撫でて通りすぎたとき、私はこの上ない幸福な気持ちに襲われて、思わず込み上げてくる涙を押さえ切れなくなった。まだ少年の頃の春の記憶が蘇ってきたのだ。それは生暖かい早春の風の記憶に過ぎなかったが、その時私はこれからの人生でこれ以上の快さと幸福感を味わうことはないであろうと思うほど感動したのだった。そしてその感動はそれ以来すっかり忘れていたものだった。

私はそこに何時間佇んでいたことだろう。周りの男女の嬌声や音楽がいつの間にか消え人通りも少なくなってきた。私は完全に満足しきっていた。人生に悔いが全くない時間を持つことができるなどと私ほど恵まれた人間は他にいないであろう。この時私は女も酒もまだ経験したことのない阿片も興味をそそられなかった。もっと激しく強力な稲妻のように襲ってくる刺激というか一瞬の破壊しか私には思いつかなかった。しかしこの穏やかな甘い海の香りの生暖かい優しい風に身を任せている時にそれは望むべきことではなかった。

あたりには全く人影もなくなつた。近くの建物の灯も消えつつあつた。灯りが少なくなると岸に寄せる波の音が微かに感じられるようになる。すると二三人の男の足音と吐息が闇の先から近づいて来るのがわかる。それが今から破裂する狂暴さを秘めているのを感じるにはほんの一秒があればいい。私はぞつとする恐怖に見舞われるが、それが身を貫く快感へ昇華していくに違いないという期待感へ変わっていくのを知るのはほんの一瞬のことだつた。私は思わず彼らの方へ一二歩近寄りかけた。至福の時をゆっくり味わつたために。

「はバリの墓場より」